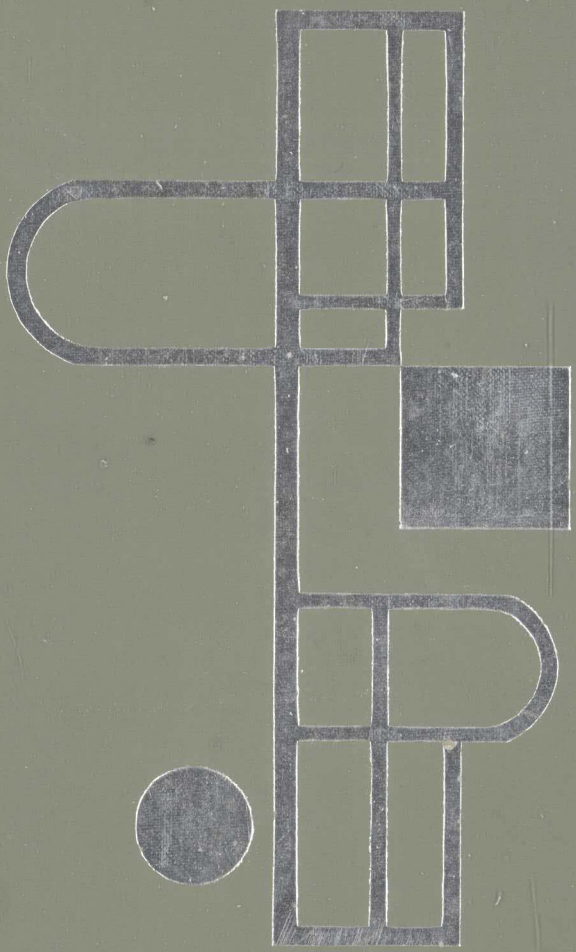
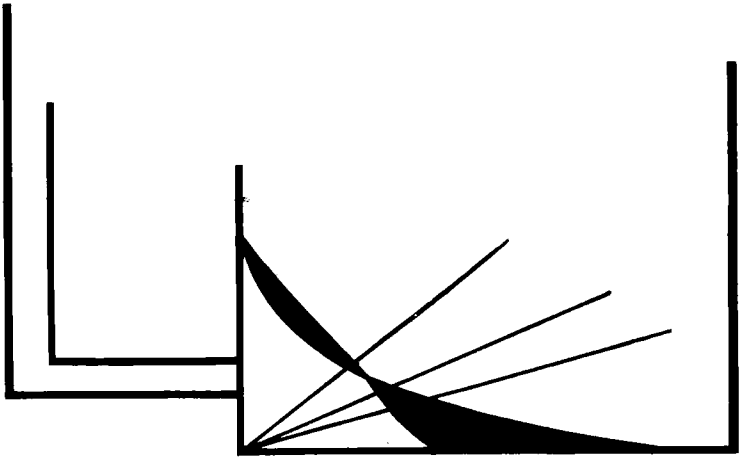


# 河上徹太郎
# 小林秀雄
# 唐木順三
# 亀井勝一郎

# 集

新選 現代日本文學全集

35



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 35

河上徹太郎
小林秀雄
唐木順三
亀井勝一郎 集

昭和三十五年十月五日 発行

著者 河上徹太郎 小林秀雄 唐木順三 亀井勝一郎

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行者 古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者 山田一雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所 筑摩書房
〔電話〕東京 三元一局(代)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製本 牧製本印刷株式会社
印刷 株式会社精興社
整版 株式会社精興社

## 河上徹太郎集　目次


私の詩と真実……七
大鳥圭介南柯の夢……五九
ヴァイオリンとオイストラフ……八三
ハムレット……八七
シンフォニイ・オブ・ジ・エア……九一
吉田健一……九六
スピードとテンポ……九九
錦川の鵜……一〇二


## 小林秀雄集　目次


近代絵画……一〇七
ボードレール……一〇七
モネ……一一一
セザンヌ……一一五
ゴッホ……一二五
ゴーガン……一四二
ルノアール……一五二
ドガ……一六二
ピカソ……一六八

## 唐木順三集　目次

鴨長明……二〇三
道　元……二三二
若き鷗外……二三七
『明暗』論……二五四
近代日本の思想文化……二七四
死について……二八四
西田幾多郎先生……二九六
カラマゾフの兄弟……三〇〇

## 亀井勝一郎集　目次

美術遍歴……三〇五
中尊寺……三〇五
吉野の山……三二二
飛鳥路……三二八
古塔の天女……三三三
廃墟（礎石をめぐって）……三三九
観音菩薩像……三三二
早逝の画家たち……三三八
北斎漫画……三四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代史の課題……三五〇
日本近代化の悲劇……三五〇
擬似宗教国家……三六一
革命の動きをめぐつて……三七二

『私の詩と真実』をめぐつて……篠田一士　四〇六
小林秀雄大概……江藤淳　四〇九
私の唐木順三論……鈴木成高　四二

宗教と文学（死をめぐつて）……三八四
信従と傍観……三八四
告白と虚構……三八九
近代化と死……三九六

亀井勝一郎論……佐古純一郎　四二五
解説……佐伯彰一　四二八

装幀　恩地孝四郎
　　恩地邦郎

# 河上徹太郎集

# 私の詩と真実

## 詩人との邂逅

まだ年よりでもないがさりとて若くもない私の年頃で、青春とは一体何であらうか？　結局混濁と錯乱と衒気に満ちてゐて、それを豊饒と間違へてゐる所のものである。つまり天地創造の時の混沌も同じものなのだらうが、その時神様の先づしたことは水と陸を大別することであつたやうに、青春の若々しい混沌も、これを整理する第一手段は、これに排水渠を作ることにある。つまり人は、その青春にあたつて先づ情熱を注ぐことは、激しい自己鍛錬によつて自分の感受性の形式を確定することである。そしてこの形式の独自性の中に、初めてその人の個性とか資質とか呼ぶべきものが芽生えるのだといふ風に私は考へてゐる。だから例へばボードレールが、

私の青春は嵐吹く闇夜に過ぎない
そこゝに陽の目は洩れこぼれたけれど。

と歌ふ時、これはこの詩人の陰惨な青春を限定したものであるよりは、むしろ青春といふもの自体の定義のやうに聞えるのである。人は歳と共に澄んでゆくものである。外に手はない。そして、省みて自分の青春を分析するなど、実は不可能なのである。

所で感受性といつても、その頃私は専ら外界の絵画的なものに対して異常な魅惑を覚えたものである。そして結局そんな所から私といふ人間は育つて行つたものらしい。私は毎日日課として二三時間の散歩をした。それが私の唯一の放蕩であつた。たわいのない話だ。そして都会風景の一角の印象を得手勝手な裁ち方で切りとつては蒐集して帰つた。私が最も好きなのは、冬の晴れた夕空の下の東京の街だつた。この季節には空気が乾いて晴れた日が幾日も続き、その暮方、すべてのビルの頂きはクリーム色に輝き、それに連る天涯は薔薇色に霞んでゐる。東京は街中も郊外も冬が一番美しい。その時刻の繁華街は、男が仕事から遊びに、女が遊びから仕事に、丁度交代する時である。然しこの場合にも私はさういふことにつき物の「情緒」といふものを、極度に軽蔑してゐた。あらゆるセンチメンタリズムを排斥することが、当時の私の自分に課した厳しい戒律であつた。私はこの戒律によつて生きてゐた。

当時私がものを見る眼は、専ら『富永太郎詩集』一巻によつて教へられてゐた。私はこの詩人と東京一中で同級であつたが、彼は当時夭折したばかりで、遺稿集が届けられたのであつた。しかも私は生前彼と文学づき合ひを全然してゐなかつたので、その繊細な感受性は、専らこの二三十篇の活字になつた詩業からのみ学びとつたのである。人は作品からは清潔な影響を受けることしか出来ない。私はこの幸運を今では感謝してゐる。

私は透明な秋の薄暮の中に落ちる。戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いてはゐない。

で始まる『秋の悲歎』と題する富永の散文詩は、彼の死の前年『山繭』といつて小林秀雄たちがやつてゐた同人雑誌に載つたものだが、文学書をまだ多く知らなかつた私は、この余り鮮かな肉感と造型性を盛つた表現に接して、驚歎したのであつた。私は直ちに、かういふ実感を実習すべく、街中をぶらつき歩いた。私の感覚の色調は富永のそれよりやゝ明るいのであつたが、初冬の首都の到る所に、さういふ情感は容易に手に入れることが出来た。

富永は同じ詩の先で続ける。

私はあまりに硬い、あまりに透明な秋の空
気を憎まうか？

こゝまで行くと完全にボードレールの世界で

ある。

秋の日の終りの何と身にしみることよ！
苦痛な程身にしみる。（『芸術家の告白』）

といふ散文詩でボードレールが見事に捕へた「無限の感覚」といふものを、富永は自らの眼に擬してこの小品を書いたのだが、私にはボードレールの創造よりも富永の応用の方がずつと身近かに感じられ、従つてその発見が新鮮で、つまりより独創的に見えたのであつた。

私の散歩は、盛り場だけでなく、濠端、屋敷町、店屋街、河つぶちの倉庫傍の細路など、行きあたりばつたりに繰り拡げられた。そしていつも共通してゐる条件は、決して連れがなく一人であることだつた。私はその頃全く友達を必要としなかつた。私に言葉を語るのは富永の詩集で一杯だつた。そして橋の上から運河を見降しては、

今宵あれらの水びたしの荷足は
すべて昇天せねばならぬ。
（『橋の上の自画像』）

と暗誦したり、又、

靴穿きて木橋を踏む淋しさ！（同上）

を実感するために、内幸町から銀座へ通じる新幸橋を渡つたりした。（この橋は半世紀たつた今日でも尚、木橋である）

丁度その頃小林秀雄は『山繭』に『一つの脳髄』といふ作品を書いた。それはむしろ蕭条たる冬の伊豆の旅を、特異な鮮かな感受性で彩つた一種の紀行文で、この種のものは、彼は後にも先にも二度と書いてゐないが、とにかく当時の私にとつては非常に感銘の深い読物で、繰返し愛読した。彼はその時、「一生に一度だけはこんな風に手離しで感受性の夢を織つて見るものだ」といふやうなことをいつてゐた。彼は更に感受性の冒険を求めて小笠原へ旅行したが、帰来その印象を口や筆にしたものは、私にはもはや前者の感激は見出せなかつた。確かに強烈な印象を受けたらしいのだが、それを取扱ふ覚悟の方が変つたのだらう。

私もその頃六十枚位の感覚的な散文を『山繭』へ載せた。それを最近堀辰雄が覚えてゐて、戦後ある書店へ勧めてくれたが、取出して見てわれながら余り幼稚なので、再録しなかつた。

然しかうやつて風景を採集してゐる私は、或ひは我々は、決して呑気な美的鑑賞家ではない覚悟を持つてゐた。それはいつて見れば、ものを見る眼を純潔にし、感傷による歪みを排し、そして知的な、人生批評的な要素を入れた、全人的態度で臨むといつた野望であつた。つまりそれは余りに知的に低かつた当時の文壇への反抗、それからひいては一般社会の俗物に対する嫌悪、――さういつたものに直結してゐる感情であつた。いや、そんな目的意識は抜きにしても、今にして思へば、私の青春が極端に感傷を排したといふことは、広くいつて浪漫主義に反逆したといふことなのであつた。

この反抗は二十世紀の曙に生を享けた児としては当然な運命であるともいへよう。この問題は独立してまともに論じる必要のあるものだが、大体十九世紀といふ時代が、一方科学主義文明の急激な発達を背景にし乍ら、殆んど全世紀に亘つて、芸術、殊に文学と音楽とが、かくも浪漫主義運動の波に浚はれたといふことは、これは果して不可避なことだつたのであらうか？自我の解放がロマンティシズムに結託することは分る。然しそれが文学愛好夫人のサロンの饒舌にお座敷を浚はれ、遂にヴィクトル・ユーゴーのメロドラマにまで到達せねばならぬ必然性があるのだらうか？ ベートーヴェンの人間性の高揚が、ブラームスの唯美主義はまだしも、何故マーラーやブルックナーの頽廃にまで堕ちゆかねばならないのか？ 私は、全然浪漫主義のない十九世紀を想像して、却つて現実的なものを感じるのである。この文化の上の歪曲は、大げさにいへば二十世紀がその前半を捧げて錯乱のうちに挽回に努めて果し得なかつたものだといへよう。そして、まる一世紀前の先駆者ボードレールが悩み闘つた相手の正体は、この時流のロマンティシズムなのである。（彼が一流のロマンティスト、ドラクロアやワグナーを率先して認めたのは、彼等の感性の純潔の中に反

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俗精神を汲んだからである。）ボードレールと、彼に少し遅れて続いた象徴主義者の間には、この反浪漫主義といふ点でのみ質的共通点がある。ランボーはこの精神を直截に、甲高い声で歌つてゐる。

俺に食ひ気があるならば、
先づ石くれか土くれか。
毎朝、俺が食ふものは
空気に岩に炭に鉄。

彼の「飢」の対象は、見られる通りすべて無機物である。それは有機的なものにある人間的臭味のすべてと一応徹底的に訣別するためであつて、それ程彼は原始的状態にある物質の実在や外貌に強烈に惹かれたのであつた。彼にとつては、人間も文明もこの種の物質であることに変りなかつた。この純潔が後年ヴェルレーヌを陶酔させ、クローデルをカトリックに改宗させたのであるが、この精神を世俗的な言葉で装へば、同じ詩の中の次の反ブルヂョア的な散文になる。

将軍よ、君の崩れた砲塁に、古ぼけた大砲が残つてゐるならば、乾いた土の塊をこめ、俺達を砲撃してはくれまいか。すばらしい商店の飾窓を狙ふんだ、サロンにぶち込むんだ。街にどろつ埃を食はせてやれ。蛇口なんざ皆んな錆びつかせてやれ。閨房にはどいつも焼けつく様な紅玉の煙硝をつめ込んじまへ……

同じやうに富永太郎は、上海に遊んで、その地の頽廃と、悪と、貧と、雑沓の、世にもあくどい、怪奇な極彩色の情景を蒐集したが、その散文詩の中で彼は、美しい抒情的な台詞を、不覚にも洩らしてゐる。

私は夢の中で或る失格をした。――私は人生の中に劇を見る情熱を急激に失つた。

だからこゝでもこの近代抒情詩人の夢は、潔癖に無機的なものの上に限られるのだ。

そして、私は花のやうに衰弱を受けた。

ランボーの色調が原色的で金属的なのに引きかへ、富永のが暗緑色で粘液質だつたのは、偶然の体質的な相違に過ぎない。共に近代の不純の中に於ける殉教者の身分と資格のうちに、己が純潔を贖はうとした点で同じなのである。

私は子供の時から仮構の稗史小説の類を好まなかつた。少年時代に『ロビンソン』も読まず、当時流行つた黒岩涙香の『モンテクリスト』や『鉄仮面』を嫌悪した。そこにある物語のエクストラヴァガンスや、感情の野卑な横溢が肌に合はなかつた。要するに私にとつて、すべてのロマンティシズムは、曖昧さ故に気に入らなかつたのである。

この一面的な見方を押し進めると、私がその頃半ば食はず嫌ひで、既存のわが文壇文学に殆んどなじめなかつた所以も理論づけられるのである。わが近代文学が明治中葉の『文学界』運動で始められたことは定説だが、これが英文学の浪漫主義の影響の下にあつたことは、日本で初めての自我の解放といふ役割を果す上で必ずしも間違つてゐなかつた。所がこれに続いて発展した自然主義運動は、決して前の主観主義に対する客観主義といつたものではなく、依然として同じ自我の解放を、今度は肉体的な面からやつていつたに他ならなかつた。その意味で暴露性の中にある感情の誇張は、依然存するのである。しかもこれらの新しい文学に対し、古い方の側の硯友社文学は、これ亦完全な浪漫派文学であることは説明を要しない。して見れば明治文学は、それぞれの偶然の事情の下に、大体の主潮は浪漫主義だといへよう。それに続く大正期の理想主義も心理的傾向も、今の場合先づ論外の現象である。

かう考へて来ると、私の青春期のわが文壇に佐藤春夫がゐなければ、私は殆んどわが既成文学に見切りをつけてゐたかも知れない。氏の『田園の憂鬱』と『都会の憂鬱』は、私が予想する能力なく待ち望んでゐた世界への新しい啓示であつた。こゝに近代的憂愁と倦怠を胸に抱いた人間が、はつきり日本の土を踏んで生きてゐる姿が描かれてゐるのであつた。作品として

は『都会』の方が遙かに立体的だ。『田園』の方は当然牧歌的で、それだけにシチュエーションに負けて感傷的なものがある。然し偶然私が今戦災を避けて住んでゐる山の中がこの作品の舞台と丘続きなので、侘住居の感傷の上で一脈通じるものが出来たといふ余事まである。

ともあれ私は、佐藤春夫の散文を、萩原朔太郎の詩と共に、二十世紀的自我をわが文壇的書割の下に植ゑつけた大切な記念碑だと思ふのであるが、私は大体文学的に人見知りの強い方で、すぐ様これらの作品を日常的に身につけるには至らなかつた。それに私は今この文章で私の読書遍歴を書かうとしてゐるのではなく、自分を語りたいのである。しかもそれを自分に最も身近かな存在との共感乃至反応の下に書かうとしてゐるのだ。

中原中也が私の前に現れたのは、先づそんな状態の時であつた。年譜によると、彼が富永を知つたのは大正十三年(十六歳)、翌年小林秀雄を知り(同年富永死去)、翌々年私と紹介されたことになつてゐる。私は彼より五つ年長だつた。

彼との奇怪極まるつき合ひについては、もう多くの人の随筆の種になつたから省かう。今見れば富永太郎が当時京都から或る友人に出した手紙に「ダダイスト(中原のこと)との dégoût に満ちた amitié に淫して四十日を徒費した。」の文句がある。偶然殆んど同じ文句を私も曾て中原に関する思ひ出の文章の中に書いたことがあつた。それを見ると、中原の発散する作用には、実に誰に対しても同じものがあつたのだ。ただ相手の状態が違つただけなのである。

初対面の日、彼は機嫌よく、又慇懃であつた。そして紳士の初訪問の如く、短時間で辞した。立去る時、君には今度出来た詩を見て貰ひたい、といつた。

その次に数日してやつて来た時見せてくれた詩は、確か忘れない積りだが、『地獄の天使』といふ題で、

……

家族旅行と木箱の過剰は最早、世界をして理知にて笑はしめ、感情にて判断せしむるなり。

――われは世界の壊滅を願ふ！　マグデブルグの半球よおゝレトルトよ！　汝等祝福されてあるべきなり、其の他はすべて分解しければ。

……

といつた詩であつた。(今創元社版全集第一巻一五二頁に載つてゐるこの詩の後に、推定一九二九―三〇、とある。すると年代が違ふが私の記憶はこれを覆す程確かでない。それにしても私の今いひたいことにこの詩を例にしても差障りはないつもりだ。)

私は自分自身の富永太郎に対する場合に擬して、中原中也をその三巻の全集だけ精読して理解してゐる人があれば羨む。私も今度これを通読して、その善意に研ぎすまされた魂の美しさに、すが〳〵しい気持になつたのであつた。この詩にしても、「家族旅行と木箱の過剰」を一方におき、「マグデブルグの半球とレトルト」を他方におく、この対比は社会形而上学(?)的に明確で、かつ私の対社会的意識の中で割り切れないで卑屈と畏怖の感情の混淆になつてゐるものを、一挙に解決する体のものであつた。正にアヴァン・ギャルドの精神の典型である。それに比べれば現在のアヴァン・ギャルドは、やむなく政治性を帯び、表象が不純で、こんな風にスカツといかないのである。とにかく私はこれで魂の中まで見透された気がした。それに彼の詩は、勿論一応客観的に歌つてゐるのだが、出来るとそれを携へていつて見せる相手の人物を可なり意識してゐることは否めなかつた。つまりそれはいつも一種の魂の相聞歌なのだが、その場合相手を理解するといふよりも、彼独得のイメーヂの動き方の中にその人物を誘導していつて暗示をかける、といつた話し掛けが含まれてゐるのである。これは現実の彼の交際術の中にもあるもので、それが正に彼の性格の魅力と嫌悪が交錯してゐる所以であり、非常に鋭く人を見抜き、又、相手に不思議な自負で阿ると共に、一方相手は飛んでもない役を振られた不愉快を与へられたりするのである。その意味で、中原は、悪意ある冷酷なリアリズムの小説家と同じやうに、モデルがなければ詩の書けない人

であつた。

勿論詩のモデルは、小説と違つて、一具体的人物ではない。中原の場合、初めの頃は、身辺の友人の一心理的動機だつたり、彼の見た性格的宿命だつたりした。時には彼の敬愛する作家の文学的モティフのこともある。(例、「風が立ち、浪が騒ぎ、無限の前に腕を振る。」これはチェホフである。「朝鮮女の服の紐、秋の風にや縒れたらん。」これはヴェルレーヌである。)それから又、彼の好きな地方の風景に寄せた独自な心象もある。といふやうな訳で、彼の詩の魅力は、丁度標題音楽を聴く時と同じで、こちらはある固定したイメーヂを見つめながら、耳に中原の個性的な、その時独自な台詞を聴くといふ、自由な楽しみがあつた。或ひは又丁度旅先から名勝絵葉書に添へて、気の利いた名調子の印象を書いてくれるやうなものだといつてもいゝ。現に、山口や萩から私に寄越した葉書文は、彼の書簡集に載つてゐるが、誰が読んでも面白いものだらうと思ふ。彼の詩はこれと同じものである。

私は中原の詩を、さういふ身勝手さでいはば偸み読んだ。そしてそれは正当に許されることだと思ふ。のみならず、私はこの態度を、彼との私的なつき合ひにも応用した。殊にかうやつて相手に不幸な若死をされて見ると、私の身勝手は今更後めたいが、然しこれは彼に対しては友人達が皆多少何かの形でやつてゐることで、早い話がさうでもしなければ我々は身が持たないのであつた。

私にとつて富永太郎詩集の後釜となつた精神的師傅は中原との交遊だつたといふべきだと、今では思つてゐる。然し私は当時「良家の子弟」だつたからか、又は運がよかつたからか、他の友達が、小は町の人々とのいざこざから、大は警察沙汰に至るつき合ひまでしてゐたやうな交渉はなかつた。むしろ私は彼の心象を強要されるのが厭で、別々に街を歩いてゐた。中原のイメーヂは富永のより一見小説的であつた。然しそれが見事な一篇の詩に嵌め込まれるのは、彼の詩作が多く示してゐる所である。彼も亦富永と同じく、「人生の中に劇を見る能力のない」人種である。只私にいはせれば、中原のイメーヂはより道徳的なのである。それが私を悦ばせたのかも知れない。

中原の詩は実に多くのヒントをヴェルレーヌから得てゐる。例へば中原の『夏』と題する

血を吐くやうな　倦うさ、たゆたさ
今日の日も畑に陽は照り、麦に陽は照り

といふのは、ヴェルレーヌの

美しの徒し陽はひねもす輝きて、
丘の葡萄に注ぎ、谷間の収穫に溢る。
わが哀れなる魂よ、眼を閉ぢて内に入れ。

といふのと通じる詩想から成り立つてゐるのだが、(私は両方の詩全体についていつてゐるのだ)仔細に見ると、ヴェルレーヌの血色に輝く落日は、寧ろ自我の外にあつてこれを侵す邪しまな被造物であるが、中原の場合は、自分の血液の中に燃えたぎる生命と同化したものなのである。こゝに中原がヴェルレーヌと似れば似る程異質的なものが発生してゐるのである。結局それは中原が「異邦人」だといふことなのだらうが、彼の場合罪の意識がヴェルレーヌ程厳しくなく、中原にとつては神が「畏るべき」ものであるより、もつとその慈愛の方を多く感じたといふべきであらう。

私にとつてカトリシズムは、それまでもあらゆる世界観の中で一番魅力のある、そして完璧なものとしての親近感はあつたのだが、中原を通じてその気持は非常にはつきりして来た。中原自身どの位カトリック的であつたかは、それ自体興味のある問題であるが、彼がその少年時代を過した山口といふ土地柄や、又信者であつた祖母などの環境から、その下地は夙にあつたにしろ、要するに彼が詩人としてのヴェルレーヌの「弱さと単純さ」といふ素質に惹かれて、その改宗の一歩手前まで随いていつたといふことで大体意を尽してゐるのである。そして私も、中原の自分自身に納得させるやうな鑑賞の仕方を通じて、ヴェルレーヌから激しい影響を受けるやうになつたのである。私は先程中原のことを「道徳的」な詩人だといつたが、もつと正確には「宗教的」といふべきだと思ふ。観念とし

てでなく、イメーヂそのものに宗教的なものの見方がはいつた詩人は、近代日本では中原が典型的なもの、或ひは極論すれば、嚆矢であり、唯一であるといへよう。

雨は　今宵も　昔　ながらに、
　昔　ながらの　唄を　うたつてゐる。
だらだらだら　だら　しつこい　程だ。
　と、見る　ゼル氏の　あの図体が、
倉庫の　間の　路地を　ゆくのだ。
……
さてこの　路地を　抜けさへ　したらば、
　抜けさへ　したらと　ほのかな　のぞみだ……

全く中原にとつてヴェルレーヌの図体は、まづ救ひのない、つまり背光を持たない聖像であつた。彼は一途にこれに縋つて、それによつていはば彼の不幸を自分の中に温めた。そしてこの不幸が彼の詩神だつたのである。所が私にとつては、中原を通じて得たヴェルレーヌ的カトリシズムは、一つの健康な、合理的な世界観の図式であつた。それはポーの『ユーレカ』の如きものに倣ひ得ようか。そしてしかもその中にやはり「不幸」が拭ひ得ないで存在してゐたとすれば、それは中原のものでも、ヴェルレーヌのものでもなく、さりとて私自身のものでもなく、それは青春といふものにつきものの混濁が窺したものなのである。私は二十五歳の頃に私を毎日襲つた焦燥を、今でも思ひ出す。あの頃の願ひは、一足飛びに二倍の年齢になることであつた。そして今日私は丁度その歳になつてゐるのである。

## 神への接近

現代人にとつて、神が存在するといふことをはつきり教へてくれるのは、結局無神論者か、懐疑論者か、或ひは少くとも信仰を失つてゐるものである。これは悲しいことである。私を最も神の傍まで曳いて行つたのは、何といつてもアンドレ・ジイドであらう。ジイドといふ人は、神の存在を確証してはくれないが、神の存在の気配は、非常に魅力ある形で濃厚に感じさせてくれる人である。特に我々「異邦人」に対する説得力を以てである。

たまたま私は今クローデルがジイドに宛てた書簡集を翻訳し終つたところだが、この厳の如き堅い信仰を持つた詩人大使と、お互の最も創作力旺盛な壮年期を親しく文通したお蔭で、ジイドの魂は明るい鏡に照したやうにクローデルの手紙に映し出されてゐるのである。クローデルはジイドが一九一四年に書いた『法王庁の抜穴』で、男色を扱つたり、法王の尊厳を汚すやうな言葉を書いたりしたので、従来にない激しい口調で詰問の手紙を書き、それから数年間やや気拙い沈黙が続いたが、その後ジイドが第一次大戦中に書いた信仰の告白『爾も亦……』を読んで、彼はすつかり機嫌を直し、一九二四年東京から次のやうに書き送つてゐる。

親愛なるジイド。あなたの『爾も亦……』を受け取つた所ですが、それは十年間途絶えてゐたあなたとの会話を再びとりあげさせてくれます。勿論その間あなたのことを考へ、あなたに対する決定的な啓示を祈るのを止めたことはありません。然しそれにしてもこの十年の間にあなたの歩いてゐる道は、私のゐるこの謙虚な大道に幾分近づいて来てゐるやうに思はれます。もしこの感動すべき小さい著書を信用するなら、今ではあなたはキリストの神性を認め、そして祈つてゐるのです。それはまるで生れたての呼吸を見てゐるのと同じやうに印象の深いものです。あなたの絶対正しい大発見は、永生は後刻に約束されたものではなく、今即刻この瞬間から始められてゐるもので、そして神の王国は私達と共に、「我等の裡に」あるといふことです。……

これほど無条件でジイドの信仰を認めたことは、クローデルの一生のうち、後にも先にもないのである。それにはジイドが戦争によつて惹起された魂の不安な呼声をこの小著の中に誠実に盛つてゐるためでもあるのだが、同時にクローデルの語調の中には、このチャンスをつかまへてジイドを真に改宗させてやりたいといふ下心があることも、正しく読みとれるのである。

だから、同じ手紙の先の方で、すぐ、いつものやうなジイドの信仰の知的なディレッタンティズムに対する不満が口をついて出て来るのである。

然し祈りながら批評的態度を持ち、或ることを認めながら他のことを受け容れない所の、信仰の快楽主義者であることは出来ないと思はれます。

ときめつけてゐる。

この小著はジイドの信仰を知るに最もいゝテクストだが、当時我が文壇では、ジイドといへば『狭き門』と『背徳者』しか出てゐなかつた時で、私は全く手探りで偶然手に入つたものから彼を読んだのだから、彼に関する認識も後から纏まつて行つたものである。ところで私もクローデルに数年遅れて本書を読み、当時次のやうに書いたのであつた。

真の理智を得んがためには、理智を棄ててかゝらねばならないのである。所がジイドは、アブラハムと異つて、我が子理智の命乞ひのために、自分自身の生命も投げ出しかねない。次にこの点に関して最も個性的な一節を『爾も亦……』の中から引かう。

十月二十一日夕。

神よ、明朝は晴々しく御身に事へるために眼覚めます様に。そして今後幸福であり続けるために必要な熱誠さの満ちた心を以て眼覚めます様に。

十月二十二日。

主よ、私の心から愛に関りないものを総べて取除けて下さい。我々の内に浄めて置かねばならぬのは神の像です。

主よ、御身が私の上に身を屈められてゐるからには、私の祈りはいとも純な祈りの如く、御身に返りゆくその反映に外ならぬやうに。

主よ、御身の聖寵を止め給ふな。私が祈りを止めないために。

これは理智家の典型的な祈りである。この両日を繋ぐ一夜、ジイドの夢は必ずうなされてゐたに違ひない。この祈りの中にパスカルのいふ賭はない。或ひはあるとすれば損も得もない様に対照表上に既に登録された賭があるのみである。莫大な賭金を得るためには、もとをすらねばならない。然し乍らもとを失はない以上、その中に莫大な賭金の可能性はある。ジイドの知的な倨傲はこの可能性に対する自信を失はなかつた。だから我々はこの祈りの中からあらゆる理智の形態を汲みとることが出来る。かくして智が智を生かして無智を建設することも出来るのである。

私は、二十一日の夕べにすべてを神に委ねたジイドが、翌日は神の愛と自分の信とをどう転んでも間違ひのない知性の駈引きの平衡の中に託して済ましてゐられるのが不遜に見えた。否、正直をいへば、反対にこの不遜に魅力を感じたといつた方が当つてゐるかも知れない。つまり一般に信仰のためには極度の無智と純潔が要求されてゐるもののやうにばかり説かれてゐる時、この理智家の駈引きに満ちた信仰の状態は、それこそ私の如き者にとつては得難い救ひなのである。だから私はジイドを非難するやうな敬虔な論理を辿ることによつて、その隙に乗じて自分の安心立命が偸みとれる気がしたのである。即ち実は内心ジイドの不遜にあやかりたかつたのである。

所が一方、我ら近代の異邦人の信仰は、あらゆる偶像を排して、己れ一人の愛と怒りを強要するエホバの神を対象とせず、どうしても汎神論的になる傾きがあるやうである。前章で私は、ヴェルレーヌに惹かれた中原中也に更に惹かれることによつて、カトリシズムに関心を持つやうになつた、といつた。私は例へばヴェルレーヌが『叡智』の中で、

こゝに働かざりし我が手あり、

といつて、悔恨の血の涙を流してゐるのを見ると、単に道徳的な反省だけでなく、意識の過剰から来る罪の深さも、神に謝らねばならぬ自責を感じるのだつたが、同時にこれによつて一種の懈怠の心も生じて、この言葉と共に自分の到

らなさを神に預けて安心してゐられるやうな不埒な心懸けも生じるのである。そしてカトリシズムに漲る非常に健康な現実肯定の精神をそのまゝ異教的に色鮮かな外界観照にすりかへて、のう〳〵としてゐるといふ始末にもなるのである。例へば中原の『この小児』といふ詩は、ヴェルレーヌのベルギー放浪時代の牧歌調を帯びた、美しいものだが、

コボルト空に往交へば、
野に
蒼白の
この小児。

黒雲空にすぢ引けば、
この小児
搾る涙は
銀の液……

（中略）

花崗の巌や
浜の空
み寺の屋根や
海の果て……

このコボルトの中に、マリアの抱く童子の上空に舞ふ天使を想像する方が詩人の意図にかなつてゐるのだらうが、同時に、字義通り魔性の妖精の姿を託した方が、この白つちやけた真昼の野の倦怠を写し得て実感があるといへよう。ヴェルレーヌならもつと画面が敬虔にしまつてゐる筈の所である。中原も私と共に、「神」を見てゐるつもりでも、どうしても「神々」を見てゐるやうである。

ジイドが見てゐたのは、「神」であるか「神神」であるか？　この場合私は自分の都合からも、それは「神々」の要素が多分にあるといひたい。それは又、智によつて信に到達するもののための、魅惑的な道草、陥穽、隠れ家である。ジイドの中でも私は『地の糧』や『ナルシス論』や『ユリアンの旅』のやうな一連のものに先づ最も眩惑されたのだが、これら近東の風物詩を基調とした散文は、どう見ても彼の異教的エキゾティシズムの上に成立つた思想である。『地の糧』に一貫する所の、

ナタナエルよ、到る所以外に神を求めようとするな。

といふ普遍的な世界観は、個別化の方向にばかりリアリティを求めるわが文学の自然主義的因襲から、私をのびのび呼吸の出来る世界へ解放してくれたものだが、然し一面から考へると、神の摂理のかういふ普遍性といふものは、とりとめなく無限定なものになり、神の営みを審美的な面から見るディレッタンティズムを生む危険が多分にある。そしてジイドの本領がそこにあることも、亦確かなことである。この問題に関して引き合ひに出すに恰好なやりとりが、前述のクローデル――ジイドの往復書簡にある。それは一九二六年ジイドがアフリカ奥地の旅行から帰つて、クローデルが留守中親切だつたことを夫人から聞いた時の御礼の手紙の一節で、友情から珍しく気を許して、信仰の上でまでいひよつてゐる。

何とカトリックたちはあなたに似てゐないことでせう！　教会の名の下に語り、嘘をつく連中が余り沢山ゐます。さういふものに出遭ふと私は屢々思ふのです、いや、私は彼等と同じ神様を拝んでゐない、と。私は本当の所唯一つの神しか拝むことは出来ない。そしてそれはあなたの神なのです。然し、一つの樹がこんな〔違つた〕果を結ぶとは、どう考へればいゝのでせう？

このクローデル一人を唆かさうとする心に反した口説に、彼は当然逆つた。これに対するクローデルの返事は、カトリックたちは自分と違つてはゐるが非常な関心であなたを見守つてをり、愛情と正当な憎しみの奇妙な混淆であなたのことを考へてゐる、云々の弁明をし、しかも彼等カトリックの神を「教会」から引出して、「到る所」に売渡さうとは決してしないのである。クローデルは、少くともジイドが『狭き門』を書いた時にした論争の中では、ジイドの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com